

福岡県立筑紫高等学校

なにごとにも全力で取り組む筑紫生を育てる授業改善

福岡県立筑紫高等学校は、昭和47年に設立された、今年で創立46年目を迎える普通科高校です。

「師弟同行（どうぎょう）」の校是のもと、「文武両道」の実現を通して、学力はもとより、自立心やチャレンジ精神に溢れた人材の育成を目指しています。全力で努力し続ける生徒と、それを支える教師との信頼関係を大切に、きめ細かな学習指導や進路指導を行っています。

1 教育目標

「国家・社会の発展に貢献できる豊かな知性と人間性、そして逞しい精神力を備えた人材の育成を目指す。さらに、社会の変化に対応できるだけでなく、変化を創造できる人間の育成を図る。」

教育活動の重点目標

- 1 授業改善を推進するとともに、生徒の主体性を育み、学習習慣の確立と学力の定着を図る。
- 2 充実したキャリア教育を通して、「志」を持った、向上心溢れる生徒を育成する。
- 3 自尊感情や規範意識を高め、健全なる心身を育むとともに、自立心とチャレンジ精神に溢れた逞しい生徒を育成する。
- 4 地域や外部団体との連携を強化することで、周りから愛され信頼される学校作りを推進する。また、広報活動を活性化し、学校の魅力を、広く、積極的に発信していく。

2 授業改善の組織的な取組

平成27年度に各教科の代表者で構成される「アクティブ・ラーニング推進委員会」を立ち上げ、学校をあげて継続的に授業改善に取り組んできました。推進委員会の定期的な開催、相互授業参観、校内職員研修における実践例紹介、教科会議における授業内容や方法・評価の検討、校外での研修会参加等を通して、情報交換が活発になったり、相互の授業から学んだことを取り入れたりするなど、組織的な取組が進んでいます。

ほとんどの教員がアクティブ・ラーニングの視点に立った授業を実践しており、同校においてアクティブ・ラーニングは日常の光景となっています。相互授業参観の際には、全員が互いの授業を参観し、全員が3年に1回は公開授業をするなど、授業改善に向けての取組も、組織的に行われています。また、アクティブ・ラーニングを支える環境として導入された3台の電子黒板も、積極的に活用されています。

3 各教科等での実践例

「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業実践例の一部を紹介します。

◆ 数学Ⅱ：単元名「微分法と積分法」

講義 教師が教科書の例題を解説する。提示した3つの問題について、
↓ 3人班の中で分担を決め、その問題を解くよう促す。

個別 生徒は分担した問題を解く。このとき、教師は声掛けをできるだけ行わず、また、生徒は周りに相談せず一人で解く。

班 生徒は3人班で相談したり、離席して同じ問題を解いた生徒と相談したりする。解決したら自分の席に戻る。

講義 教師は、生徒が解決した問題の内容を踏まえ、応用例題を解説する。次に、発展問題を提示し周りと相談しながら解くよう促す。



数学の授業での教え合い

自分の考えと他者の考えを比較・検討することで、より筋道立てて自分の考えを記述することを大事にする授業が展開されています。また、協議の内容が深まるように、生徒が思考するのに必要な知識は教師が講義で示したり、班で協議をする前に個人で考える時間をとったりするなどの工夫をしています。

4 「総合的な学習の時間」における取組

平成29年度（現第2学年の入学年度）から、「課題解決型探究学習」の授業を行っています。

(1) 地域課題解決型探究学習「Project C」（平成29年度／第1学年）

「Project C」のCは校名である筑紫（Chikushi）のC、学校所在地である筑紫野市（Chikushino City）のCに由来します。教員が、自分の将来について明確なイメージをなかなかもつことができない生徒の姿を見て、「高校時代に、地域の課題に目を向けておけば、将来地元に残ったときに地域貢献ができるのではないか」と考えたのがきっかけで、この探究学習が開発されました。

生徒は、地元の筑紫野市役所に勤めている本校の卒業生に、テーマ別に出席講義をしてもらいました。そして、卒業生から提示された問いについて、計6回にわたって課題解決策を検討するグループ活動を行った後、発表会を行いました。

◆平成29年度：卒業生から提示された問い◆

観 光	高校生も行ってみたい、訪れてみたい筑紫野市の観光モデルコースを考えてください。
地域コミュニティ	「（スタッフorお客さんとして）自分も参加してみたい！」と思えるような、地域コミュニティ活動を提案してください。
福 祉	障がいのある人々に必要な生活の中の配慮を考え、それを啓発する「もの」を作成し、その「もの」を周知する方法を考える。
防 災	筑紫高校版「避難所運営マニュアル」を作成してほしい！
環 境	「自然と街の共生都市」の実現のためには？

グループで地域の課題を解決するという学習を通年で実施したことにより、生徒は協働して情報収集を行い、課題解決策を十分に検討することができました。生徒が実際に生活している地元筑紫野市の解決したい課題を、卒業生から解決して欲しいと投げかけられたことにより、生徒は自分事として捉え、自分たちなりの解決策を考えることができました。

(2) 課題解決型探究学習「Project G」（平成30年度／第2学年）

「Project G」のGは、globalとlocalを合わせた造語「Glocal」に由来します。昨年度（平成29年度）に「Project C」で探究学習を経験した生徒たちは、今年度は探究の対象を地域から地球規模にまで広げた「Project G」に取り組んでいます。国連によって示された持続可能な開発目標（SDGs）として掲げられた17のゴール（目標）のうち、日本が優先課題として策定した8つの課題を組み合わせ、生徒は計10回のグループ活動で課題解決に向けた方策を考案し、3学期に発表することになっています。



講座別発表会の様子（昨年度）

5 アクティブ・ラーニング導入の成果

生徒は、50分の授業時間の中で、聞く場面、情報収集をする場面など、めりはりをつけることができおり、集中度が高まりました。授業の中で教え合う場面を設けたことで、休み時間にも、生徒が集まって教え合ったり、協力して解決したりしている姿が見られるようになりました。

6 今後の方向性

「活動あって学びなし」ではなく、何を身に付けさせるかを明確にした授業が展開できるよう、学校をあげて授業改善を重ね、「主体的・対話的で深い学び」につなげていくことができるよう取り組んでいきます。また、昨年度から取り組み始めた探究学習の授業を、3年間を見通したものにしていきます。